

鹿児島県総合教育センター
平成29年度長期研修研究報告書

研究主題

社会参画の基礎を育てる地理的分野の
指導の在り方

—単元を見通した指導計画と学習課題 問いの工夫を通して—

長島町立鷹巣中学校
教諭 上ノ町亮一

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題についての基本的な考え方	2
(1)	社会科の学習を通して目指す生徒の姿とは	2
(2)	社会参画の基礎とは	2
(3)	社会参画に関する各校種，領域間のつながり	4
(4)	社会参画の基礎に関する地理的分野と公民的分野のつながり	5
(5)	取り上げる身近な地域について	6
2	生徒の実態	6
(1)	実態調査の方法	6
(2)	分析と考察	6
3	地理学習の有用性を味わわせ，地理的分野への興味・関心を高めるための工夫（視点1）	8
(1)	地理的な見方・考え方を生かした考察とは	8
(2)	問いと習得する知識の関連	9
4	地域の在り方について考察し，生徒の社会参画意識を高める工夫（視点2）	10
(1)	身近な地域素材の教材化	10
(2)	諸地域と身近な地域における知識の関連付け	11
5	社会参画の基礎を育てる単元構成のモデル（視点3）	11
6	検証授業Ⅰ（「九州地方 ー環境問題，環境保全に向き合う人々の暮らしー」）の実際	12
(1)	検証授業Ⅰの概要	12
(2)	第5時の実際	14
(3)	検証授業Ⅰの考察	16
7	検証授業Ⅱ（「中国・四国地方 ー都市と農村の変化と人々の暮らしー」）の実際	18
(1)	検証授業Ⅱの概要	18
(2)	第5時の実際	23
(3)	検証授業Ⅱの考察	24
IV	研究のまとめ	28
1	研究の成果	28
2	今後の課題	28

I 研究主題設定の理由

グローバル化する国際社会の中で日本は多くの社会問題を抱えており、世界で起こっている紛争や貧困、環境問題など様々な問題においても他人ごとではない現実がある。このような社会問題に向き合うためには、社会参画意識をもち、身近な問題から積極的に関わっていくことが大切である。そのような中、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によると、「私が参加することで社会を少し変えられるかもしれない」という社会参画に関する調査項目について、日本の中・高校生は他国と比べて意識が低い傾向が示された。このようなことから、若者の意識を変えていくには若者が社会に積極的に関わろうとする態度の醸成につながる教育を進めることが必要である。

平成29年3月、新学習指導要領における中学校社会科の目標として、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ちグローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことが明記された。生徒が社会認識を深めて、社会的事象を自分のこととして捉え、課題解決に向けて主体的に学習に取り組むことで、生徒は社会の形成者として自覚し、社会参画意識が向上していくと考える。この一連の過程を「社会参画の基礎」と位置付け、将来国や社会の問題に積極的に参画できる人材の育成につなげたい。

本校は、真面目で素直な生徒が多く、課題や作業に対して与えられたことには責任をもって取り組むことができる。しかし、主体的に取り組もうとする生徒が少なく、また、習得した知識を活用して考察し、自分の意見を伝えることや、他の意見と自分の意見を比較したり考えをまとめて表現したりすることを苦手とする生徒が多い。これは、新学習指導要領における「三つの資質・能力」がバランスよく育まれていない状態にあると考える。

今回の学習指導要領改訂では、高等学校地理歴史科において「地理総合」が必修科目として新設されることとなっている（「地理探究」は選択科目として新設）。この科目が設立される背景に、日本史や世界史と比べて地理の選択者が少なく最低限の地理的技能をもたずに卒業する生徒が多いこと、地理的技能を生かした空間的思考力の向上が全ての国民に必要な生きる力の一つであること等が挙げられる。高等学校で新設される「地理総合」、「地理探究」につなげるためにも、中学校で地理的分野への興味・関心を高め地理的認識を深めたい。また、地理的分野の学習を通して地域の地理的な課題に気付き、地域の在り方について構想する地理的分野における社会参画の基礎を育成することは、対立と合意、効率と公正などの視点でより良い社会を目指して考察、構想する公民的分野の学習につなぐ上においても意義あるものと考えられる。

そこで、本研究では、地理的分野の学習において地理的な見方・考え方を働かせ地理的認識が高まる過程を明確にした上で、単元全体で社会参画の基礎を育てていくために有効な学習課題や問いの在り方について研究し、それを生かして単元構成のモデルを構築していく。授業では、「日本の諸地域」の単元で諸地域の地理的事象と身近な地域を結び付ける活動を展開する。単元の終末には、身近な地域に関する問題点や改善策をこれまで習得した知識と新たな資料から判断し、持続可能な町づくりに向けた地域の在り方について考える学習活動を展開する。

これらの実践研究によって、地理的認識の深化と社会参画意識の向上、更には社会科の目標である公民としての資質・能力の基礎を育成することにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

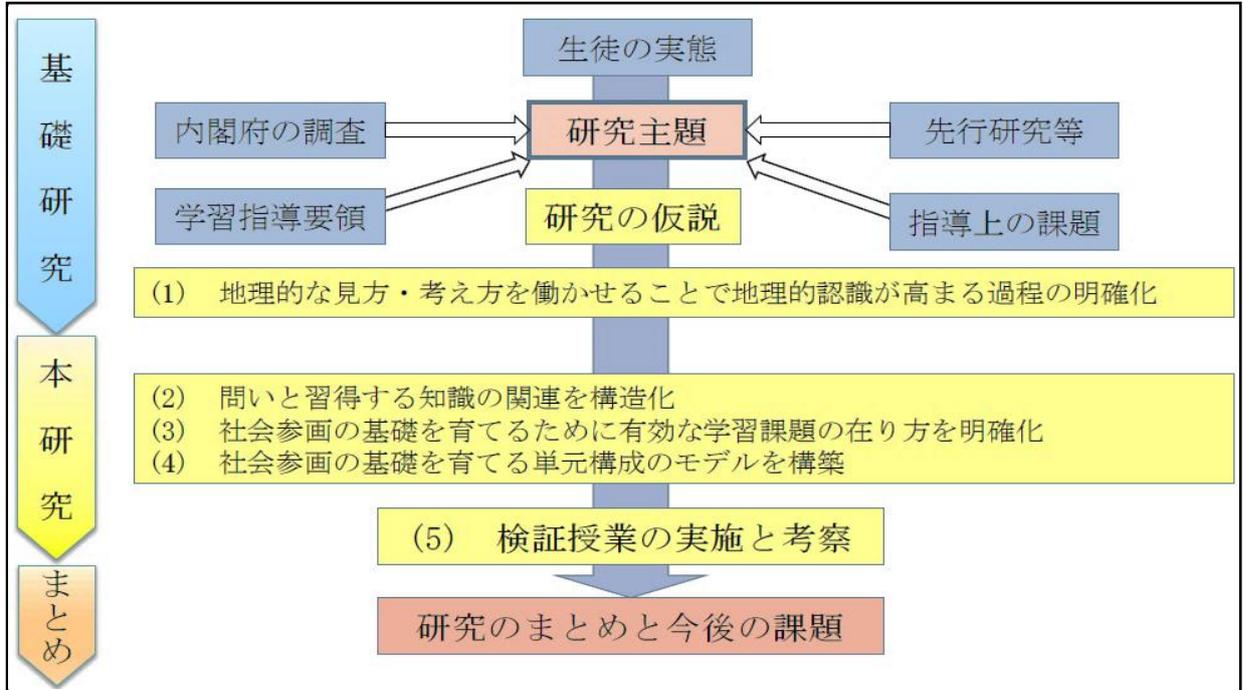
1 研究のねらい

- (1) 地理的な見方・考え方を働かせることで地理的認識が高まる過程を明らかにする。
- (2) 問いと習得する知識の関連を構造化する。
- (3) 社会参画の基礎を育てるために有効な学習課題の在り方を明らかにする。
- (4) 社会参画の基礎を育てる単元構成のモデルを構築する。
- (5) 検証授業を行い、本研究の成果と課題を明らかにする。

2 研究の仮説

地理的な問題を解決する学習過程において、生徒が地理的な見方・考え方を働かせて地理的認識を高めるために、教師が学習課題及び問いを工夫し、日本の諸地域と身近な地域を結び付ける単元構成で授業を進めることができれば、生徒は諸地域と身近な地域を関連付けて主体的な課題解決学習を展開できるようになり、生徒の社会参画意識は向上するのではないか。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題についての基本的な考え方

(1) 社会科の学習を通して目指す生徒の姿とは

本研究では、「社会参画」を「自ら計画し、実際に運営するまでの全てに関わること」と捉え、「社会参加」と区別して考えていく。

1951年(昭和26年)に発行された「小学校学習指導要領社会編(試案)」の中に、「社会の進展に貢献する態度や能力を身に付けさせる」、「社会を進歩向上させていくことができるようになることを目指す」とある。また、現行学習指導要領において、「公民としての資質」の中の一つに、「推進に向けて主体的に参加、協力する態度」が挙げられていること、新中学校学習指導要領の目標において、「公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことが示されていることから、将来主体的に社会に参画する人材を育成する点において、社会科の学習が重要な役割を担っており、生徒の社会参画が社会の形成者として求められている力であることが分かる。

そこで、生徒が社会科の学習を通して社会的事象を自分との関わりから見つめ、そこから見えてくる問題を発見し、学んだことを生かしながら他者と協力して問題の解決に向けて考察していく力を身に付けられるようにしたい。ここにねらいを定めることで、社会的事象に対する興味・関心や社会の形成者としての自覚、主体的に社会に参画する意識が高まり、グローバル化する国際社会に主体的に生きる、平和で民主的な社会の形成者へと成長していくものとする。

(2) 社会参画の基礎とは

前項で述べたように、社会参画は国家及び社会を形成する上で極めて重要であり、教育基本法、学校教育法においても、「社会の形成者として主体的に社会に参画していく資質や能力を育成すること」が明記されている。

しかし、内閣府の調査*1) (2013)によると、「社会をより良くするため、私は社会における問題に関与したい」、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」の調査項目において、諸外国と比べて社会参画意識が最も低い結果が出た(図1)。このようなことから、中教審答申では社会参画への態度の育成が不十分であることが指摘されている。

新学習指導要領では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力が結び付くことで、「公民としての資質・能力の基礎」が育まれていくと示されており、「学びに向かう力、人間性等」の中に、より良い社会の形成に参画しようとする態度(社会参画)について盛り込まれた。地理学習を通して社会参画の基礎を育むためには、生徒が地理的事象をより身近に感じ、自分に関わる社会問題として捉えることが大切である。そこで、日本の諸地域の単元の中に身近な地域の学習を組み込むことで、生徒は諸地域で習得した知識を生かして身近な地域の地理的事象と関連付けて認識を高められるようになる。そして、生徒が主体的に問題点を見いだして解決に向けて構想していく授業が展開できるようになることで、生徒の社会参画意識は向上していくと考える。本研究では、この一連の学習過程を通じて育まれた社会参画意識を「社会参画の基礎」と捉え、社会科の授業を通して育てていく。そのためには、教師が授業の中で身近な地域について考察する場面を意図的につくり出し、地域の問題解決に向けて主体的に構想していく授業を積み重ねていくことが大切である。そして、その成果として社会科全体の目標である公民としての資質・能力の基礎の育成につながると考える(図2)。

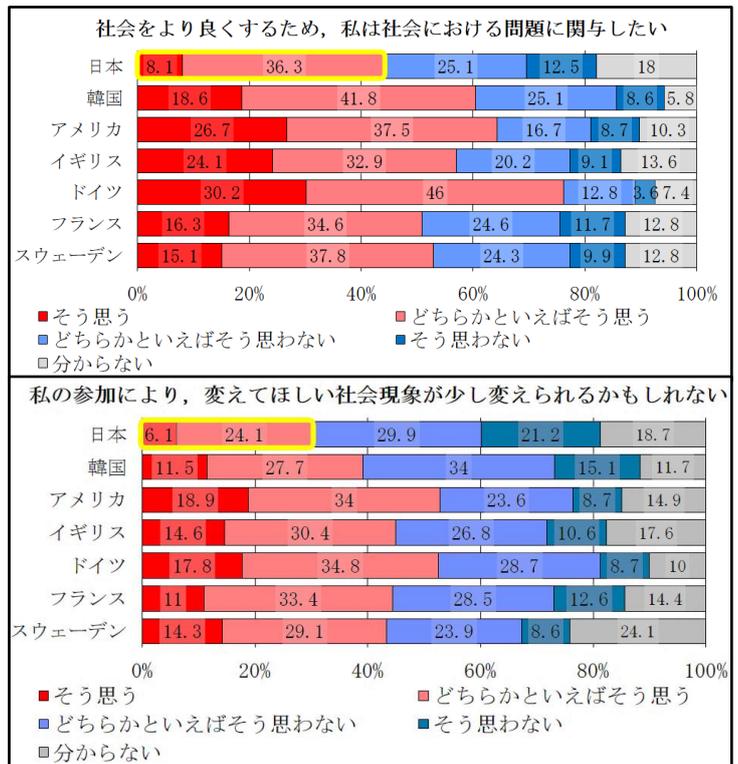


図1 社会参画意識に関する調査結果

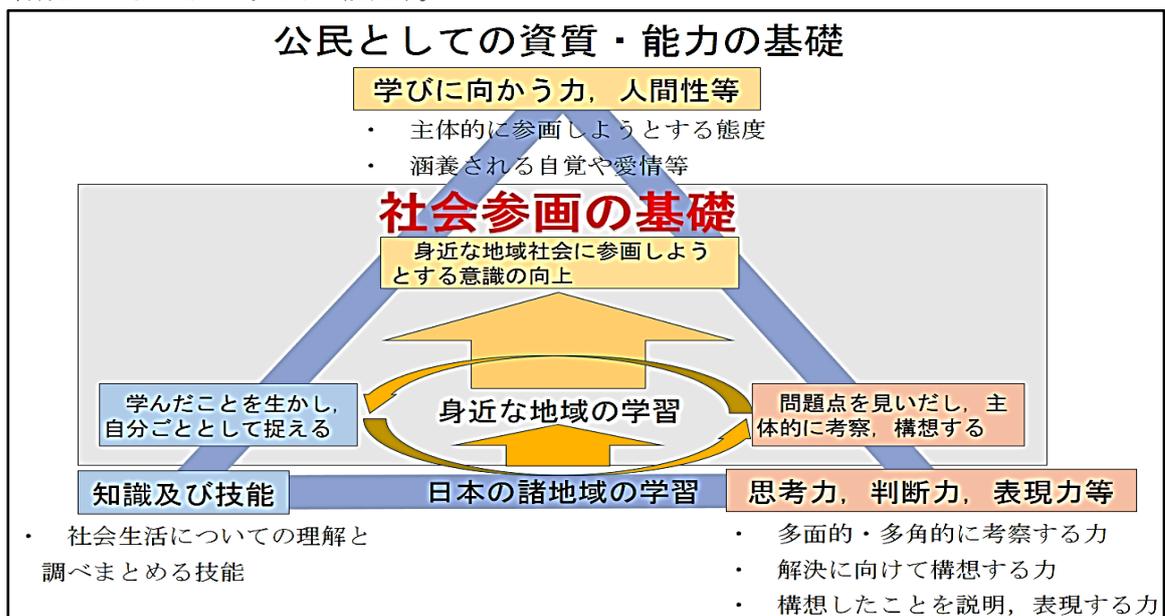


図2 三つの資質・能力の中で育む社会参画の基礎とは

*1) 内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(2013)

(3) 社会参画に関する各校種、領域間のつながり

図3は、各校種、領域で育てたい社会参画への態度を示したものである。社会参画への態度は、一時的な取組で身に付くものではなく、小学校から高等学校に向かって徐々に高められていくものである。社会科においては、図3のようなプロセスを経て高められていくものとする。

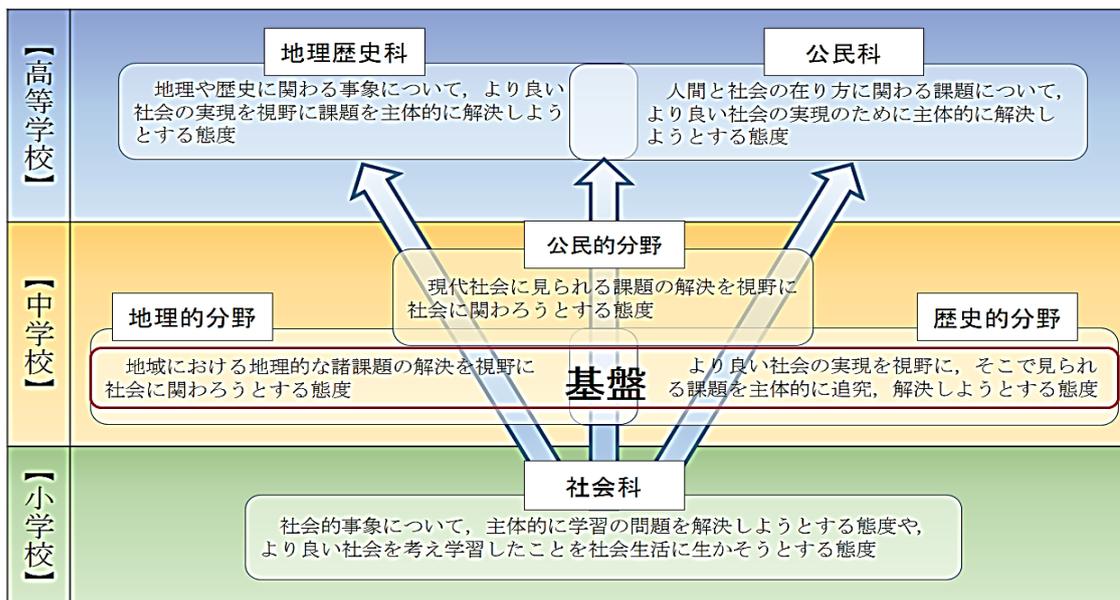


図3 各校種、領域で育てたい社会参画への態度

小学校では、問題解決学習を通して、社会的事象の特色や相互の関連を考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする学習活動を通して、社会生活について理解し、社会への関心を高める。さらに、中学校では小学校社会科で学んだ成果を生かし、広い視野に立ってそれぞれの領域の社会的事象について考察していく。社会参画の視点は、地理、歴史、公民それぞれの領域で盛り込まれているが、地理的分野においては、位置や空間的な広がりに着目し、日本や世界の地域に関わる諸事象を捉え、より良い社会の実現を視野に、そこで見られる地理的課題を主体的に、追究、解決しようとする態度を養う。また、歴史的分野では、時期や推移などに着目してより良い社会の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に、追究、解決しようとする態度を養う。これらの領域の学習を基盤として公民的分野の学習に入ることで、社会科全体で主権者として持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識を涵養する。さらに、より良い社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度が育つと考える。

新高等学校学習指導要領では、地理歴史科の履修科目として「地理総合」が新設される(図4)。この背景には、東日本大震災等の自然災害により、地理的技能が全ての国民に必要な生きる力の一つとして重要視されたことなどが挙げられている。「地理総合」では、持続可能な社会づくりに必須となる地球規模の諸課題や、地域課題を解決する力を育むことを目的として

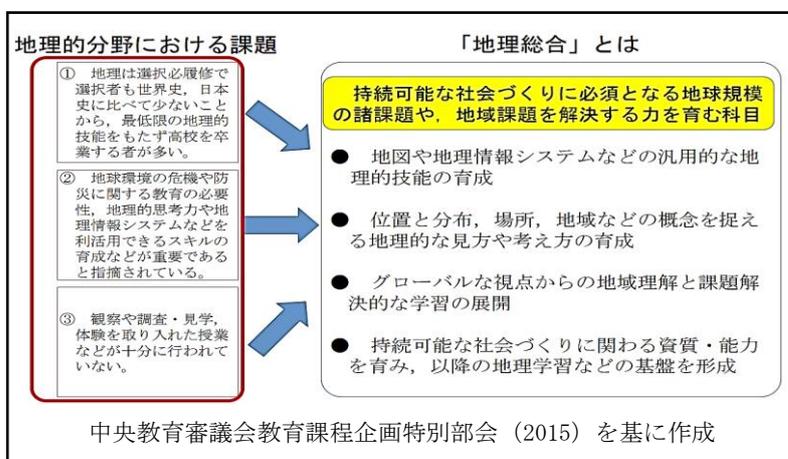


図4 地理総合について

そこで、高等学校の地理学習へつなぐためにも、まず、身近な地域について持続可能な社会づくりの視点で考察する力を身に付ける必要があると考える。

(4) 社会参画の基礎に関する地理的分野と公民的分野のつながり

今回の改訂では、日本の諸地域を学習した後の「地域の在り方」の単元で、身近な地域について社会参画の視点で地理的課題を考察する探究的な学習を行うことが示された。この単元は、世界や日本の様々な地域で習得した知識、概念や技能を生かして地域の地理的課題を見だし、解決に向けて考察する学習を地理的分野のまとめとして行うこととなっている。身近な地域は、生徒が生活の舞台にしている地域であり、学習対象に直接触れることができる教材の一つである。しかし、先行研究では、身近な地域に関する授業に対して教材づくりの負担や評価への不安、困難さを感じている教師は少なくないと指摘されている。三つの資質・能力をバランスよく育み、社会科の目標である「公民としての資質・能力の基礎」を養うためには、身近な地域を教材化し、生徒が社会を身近に感じるための工夫が必要である。

また、社会参画意識が高まらなければ、より良い社会の形成者として社会に参画する態度は育たないことから、本研究で行う地理的分野の「日本の諸地域」の単元では、世界の諸地域の単元で培った地球的課題の視点を生かし、学習指導要領に示された考察の視点に基づいて地域を見つめられるように学習を進める。日本の諸地域は、身近な地域と関連付けやすく、各地域の考察の視点が明確になっていることから、身近な地域の地理的課題に対して様々な視点で考察できるため、社会参画の基礎を育みやすいと考える。そして、地理学習のまとめとなる「地域の在り方」では、「日本の諸地域」の授業を通して培った社会参画の基礎を生かして実際に地域を調査し、地域的な問題の解決に向けて構想したことを地図や統計、モデル図などにまとめていく。さらに、公民的分野では、地理的分野、歴史的分野で構想したことを統合して、現代社会の見方・考え方を働かせた視点で未来に向けて自分たちができることを考えられるようにし、意思決定や行政機関への提案、町づくり体験などの活動から、実際の参画へとつなげたい(図5)。

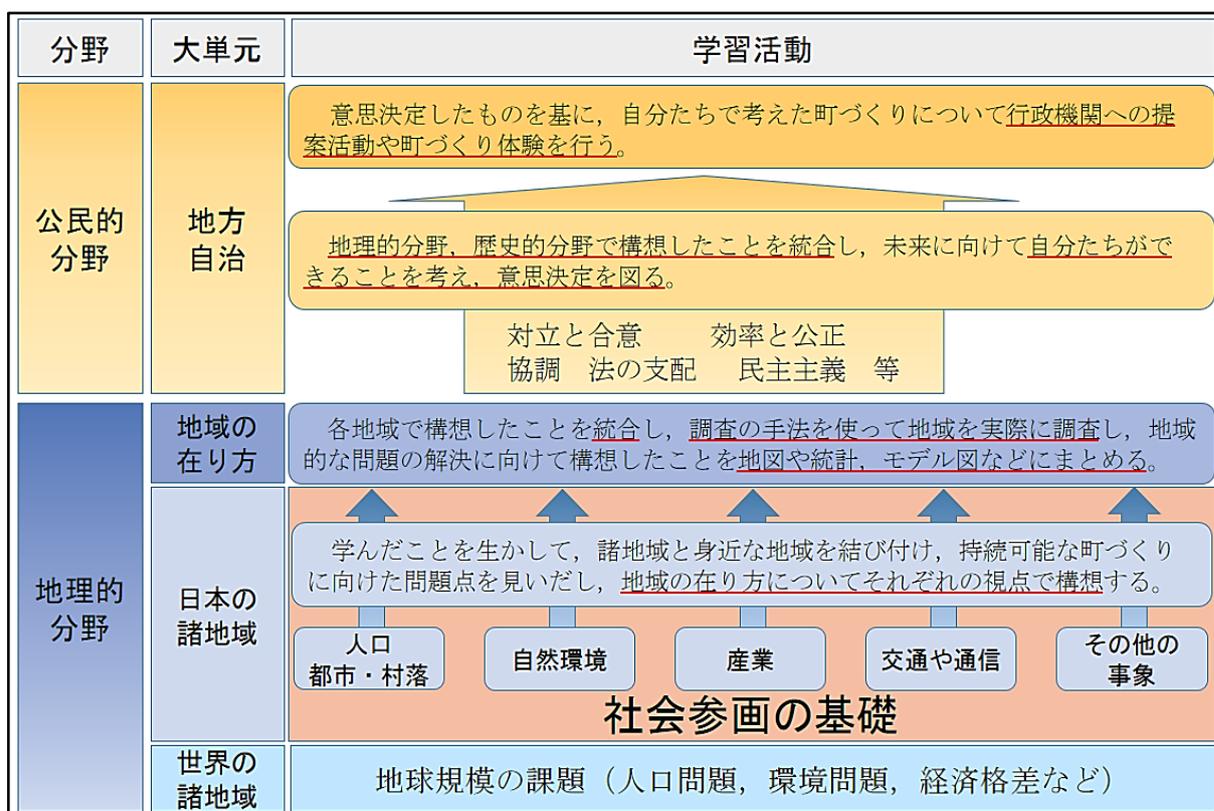


図5 社会参画の基礎に関する地理的分野と公民的分野のつながり

(5) 取り上げる身近な地域について

今回は、生徒が実際に生活している舞台である長島町にスポットを当て、フィールドワークや取材を通して教材化を図ることとした。

長島町は、鹿児島県の北部に位置し、長島、伊唐島、諸浦島、獅子島等の複数の島々から構成されており、自然が豊かで風光明媚な場所として知られている町である。元々は離島だったが、黒瀬戸大橋、乳之瀬橋、伊唐大橋等の橋で島々が結ばれ、現在は、獅子島以外の主要な島を車で移動することが可能である。基幹産業は、ジャガイモやミカン、花卉栽培等の農業、ブリやタイ等の養殖業をはじめとする漁業が中心で、生産年齢人口の約50%は第一次産業に従事しており、食料自給率は100%を超えているとされている。また、風力発電、太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの生産にも力を入れており、その発電量は、長島町全家庭で使用する電気量の約1.5倍とされている。近年、食料自給率やエネルギー生産の高さから、本町が独立しても成り立つという意味を含めて「長島大陸」(商標)という呼び方が生まれ、自治体を中心に広く使用されるようになってきている。

そこで、本研究では、生徒に「持続可能な町づくり」という視点で身近な地域の地理的事象について考察させることから、「長島大陸」の呼び名や言葉の意味を授業で取り入れて、社会参画の基礎を育み、生徒の社会の形成者としての自覚、主体的に社会に参画する意識が高められるようにする。



2 生徒の実態

(1) 実態調査の方法

- ア 対象 長島町立鷹巣中学校第2学年生徒45人
- イ 実施日 平成29年6月2日(金)
- ウ 方法 質問紙法
- エ 内容 社会参画意識と地理的分野への興味・関心

(2) 分析と考察

これまで生徒は、「世界の様々な地域」や「日本の様々な地域」の単元を通して、世界や日本国内で起こっている社会問題について理解を深めてきている。今回の実態調査では、右のような視点で本校生徒の実態を調査することとした。この調査を通して、生徒の身近な地域における地理的事象への問題意識や社会参画への意欲、地理学習の有用性について分析を行うこととする。

ア 身近な地域における問題意識について
身近な地域が抱えている問題意識については、図6のように人口問題と環境問題が大きな割合を占める結果となった。項目別では、少子高齢化、ゴミ問題、海上汚染の順に多く回答している。これらは、長島町が毎月各家庭に配布している町報等の身近な資料や、家族や地域住民等から聞いたり、実際に見たりして判断していると考えられる。無回答の生徒は

- 【実態調査の視点】**
- 1 地域が抱えている問題意識【図6】
 - 2 地域の問題に対する、解決への思いと、実際の社会参画による問題解決への影響【図7】
 - 3 地理学習に対する興味・関心【図8】
 - 4 地理学習が普段の生活に役立つという意識(三つの資質・能力を基に)【図9】

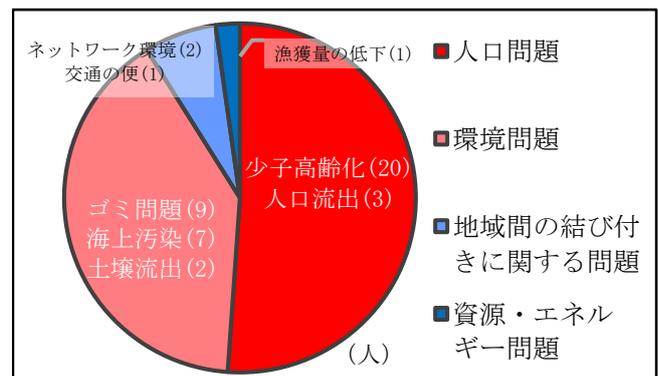


図6 身近な地域における問題意識

いなかったことから、生徒は身近な地域の問題について意識していることが分かった。

イ 身近な地域の社会参画に関する意識について

社会参画意識に関する質問項目では、**図7**のように「解決したい思い」の回答と「自らの参画が与える影響」に関する回答に大きな差が出る結果となった。このことは、「解決したいと思うか」の質問項目が、内閣府の調査と違い身近な地域という自分の生活空間に限定した質問となっていることが大きな原因であると考えられる。「自らの参画が与える影響」に関する質問項目では、内閣府の調査より肯定的な回答の割合が高いものの、約半数の生徒が否定的な回答をしていた。また、社会参画が難しい理由としては、「まだ子供だから（6人）」、「自分一人では難しい（5人）」、「加速している問題の解決は努力してもできない（5人）」、「いずれ自分は町から出て行く（4人）」などを挙げていた。

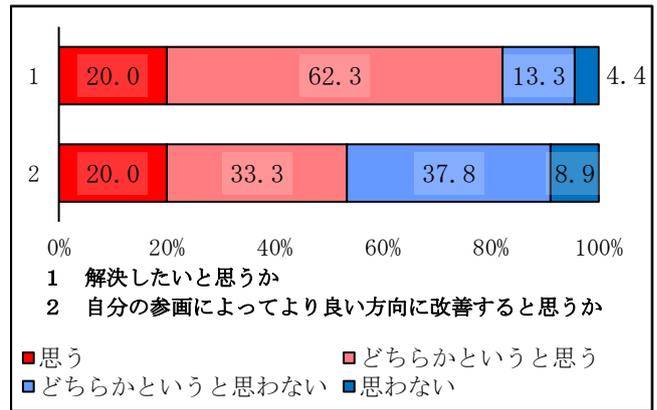


図7 身近な地域の社会参画に関する意識

ウ 地理的分野の学習に対する興味・関心と生活との関連について

地理的分野の興味・関心については、**図8**のように社会科全体と比較して低い結果が出た。否定的な回答をした理由として、「様々な資料から地理に関する情報を調べまとめる（知識及び技能）」や、「学習課題の解決に向けて考え、判断し、自分の考えをノートに書く（思考力、判断力、表現力等）」ことが苦手であることを挙げていた。

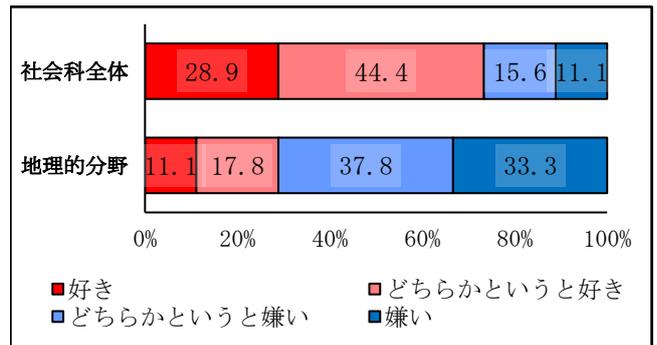


図8 地理学習に対する興味・関心

また、地理学習で学んだことが普段の生活の中で役立つという意識については、**図9**のように「様々な資料から地理に関する情報を調べ、まとめる（知識及び技能）」、「学習課題の解決に向けて考え、判断し、自分の考えをノートに書く（思考力、判断力、表現力等）」の項目で、「役立つ」、「どちらかという役立つ」と回答している生徒が興味・関心の低さと関連しているように低かった。一方、学習課題の解決に向けて、考え、判断したことを「ペアやグループで説明し合ったり、議論したりする（思考力、判断力、表現力等）」、日本や世界の地域について、「より良い社会に向けて課題を追究し、解決方法を考える（学びに向かう力、人間性等）」の項目については、「役立つ」、「どちらかという役立つ」と回答している生徒が多かった。この調査結果から、地理的分野への興味・関心を高め、社会参画の基礎を育てていくためにも、以下の点について授業改善を図っていく必要があると考えた。

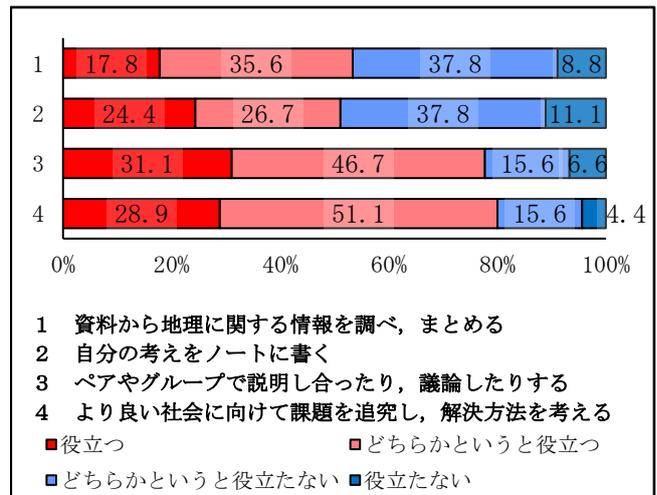


図9 地理学習と生活とのつながり

この調査結果から、地理的分野への興味・関心を高め、社会参画の基礎を育てていくためにも、以下の点について授業改善を図っていく必要があると考えた。

そこで、地域や人々の生活における問題点が見え、その地域が今後も持続していくためにはどうしたら良いか、どのような解決策をとれば良いか構想していく。この構想が、高まった地理的認識を生かして地域の在り方を考察する持続可能な社会づくりの視点となり、社会参画の基礎が育まれることで公民としての資質・能力の基礎の育成へつながると考える（図10）。

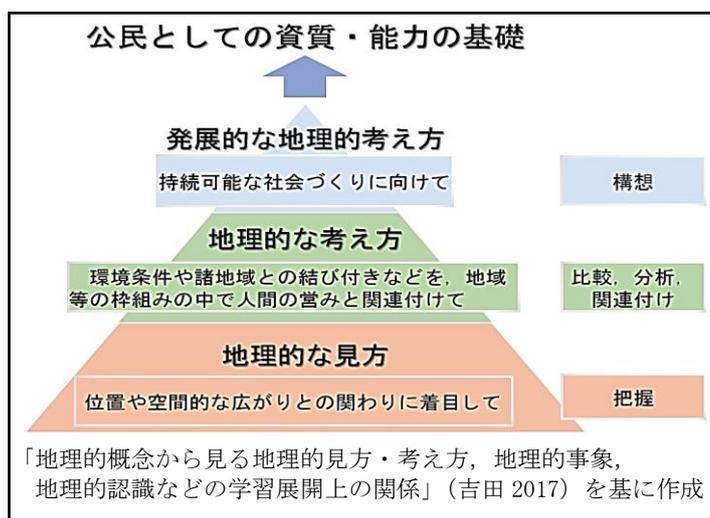


図10 地理的な見方・考え方の成長図

(2) 問いと習得する知識の関連

ア 「発問」と「学習課題」

単元及び単位時間で生徒に身に付けさせたい内容が学習のねらいとなるが、授業者は生徒が到達すべきゴールを問う形で表現したものを問いとして設定することになる。設定する問いは大きく2種類あり、教師が発する問いである「発問」に対して、生徒と教師が協働で作り上げていく問いである「学習課題」がある。生徒の思考が結び付き地理的な見方・考え方を成長させるためにも、この二つの問いをつなげてゴールに導くことが大切である。

イ 問いと習得する知識の関連

地理的な見方・考え方を働かせ、地理的認識を高めるためにはどのような問いの形があるのかを、小原^{*3)}（2016）は観点別目標の構造化モデルを示し、習得する知識と問いを結び付けて図式化した。図11は、そのモデルを参考に、思考と問い、習得する知識の関連について示したものである。

「把握」は、社会を知るための思考であり、「どのように、どのような」の問いと結び付く。生徒は、具体的事実を生かして、写真や資料から地理的事象の位置や分布、規則性や傾向性について記述することで「記述的知識」を習得する。

また、「比較、分析、関連付け」は社会が分かるための思考であり、

「なぜ、どうして」の問いと結び付く。生徒は、記述的知識を生かして、自然条件や諸地域との関連について比較、関連付けを行い、自然や地域と人々の生活との因果関係について説明することで、「説明的知識」を習得する。

「構想」は、より良い社会を作るための思考であり、「どうしたら良いか、どのような解決策が望ましいか」の問いと結び付く。また、高まった地理的認識を生かし、持続可能な社会づくりに向けた地理的事象に関わる問題解決策の決定や、目標・目的を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定するために行う判断を通して、「判断的知識」の習得につながる。

このように、地理的事象の事実を認識する段階から、学んだことを活用して地理的事象の因果関係や根拠をつかみ、地理的事象について構想、判断する段階に応じた問いを教師が意図することで、生徒の思考が結び付き、地理的認識が高まると考える。

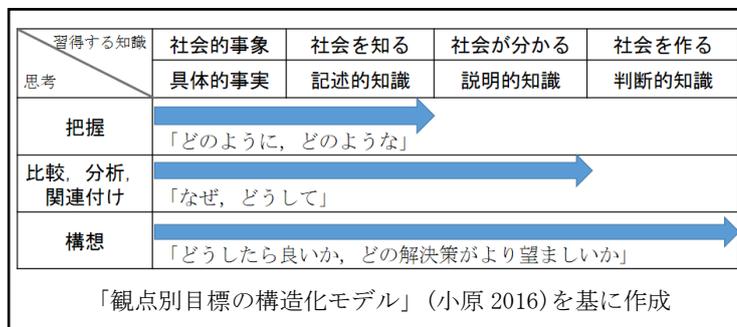


図11 思考と問い、習得する知識の関連図

*3) 小原友行『アクティブ・ラーニングを位置付けた中学校社会科の授業プラン』 2016 明治図書

ウ 単元を貫く学習課題と社会参画の基礎を育てる学習課題

課題を追究したり、解決したりする学習を、新学習指導要領解説社会編では次のように示している。

単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し、諸資料や調査活動などを通して調べたり、思考・判断・表現したりしながら、社会的事象の特色や意味などを理解したり社会への関心を高めたりする学習

地理的分野への興味・関心を高めていくためには、学習課題に基づいて思考、判断、表現する活動を積み重ねていくことが大切である。今回は、単元全体で社会参画の基礎を育てていくために、探究の視点を明確にした単元を貫く学習課題を設定する。設定する学習課題は、解決しようとする意欲が高まる内容でなくてはならないため、生徒と教師が協働で学習課題を練り上げて単元を通して課題を解決していくことが望ましいと考える。

また、「日本の諸地域」で学習した諸地域のことから身近な地域の課題解決に向けた構想につなげるためには、それを結び付ける新たな学習課題が必要である。その際、生徒の思考に差異を生み出させる手立てを講じる必要がある。吉川^{*4)} (2002) は、社会的事象をより深く考察し、課題解決的な学習へと発展させるためには、他の社会的事象との差異について思考させるための問いの必要性を述べており、単文型の問いではなく複文型の問いが有効であることを指摘している(図12)。

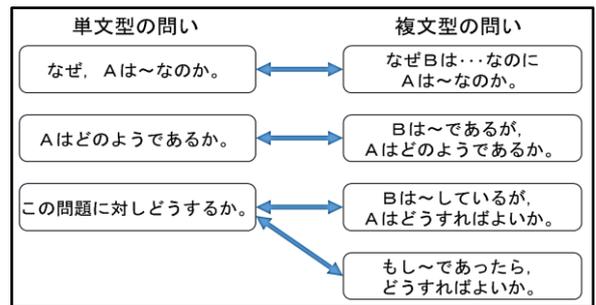


図12 単文型の問いと複文型の問いの違い

複文型の問いは、単文型の問いよりも社会的事象の探究視点として優れている点が多く、自然発生的である、問題点の焦点化がしやすい、直接・間接的な経験と結び付きやすいなどのよさが考えられる。本研究では、複文型の問いを生かして諸地域と身近な地域を結び付けることができなかと考え、単元の最後に「社会参画の基礎を育てる学習課題」を取り入れて、諸地域と身近な地域の差異について深い考察ができるようにしたい。

これらを基に、二つの学習課題によって諸地域から身近な地域の構想に結び付けた単元の流れが図13である。まず、資料から生徒と教師が協働で単元を貫く学習課題を設定することで諸地域を見ていく視点が明確になり、自然環境や人々の生活の様子などを通してその地域の様子についてより深く考察していくようにする。そして、諸地域と身近な地域を結び付けるために、「〇〇地方では□□だが、自分たちの町ではどうすれば良いだろうか」などの複文型の問いを用いて差異について思考を深め、新たな学習課題を生み出させる。

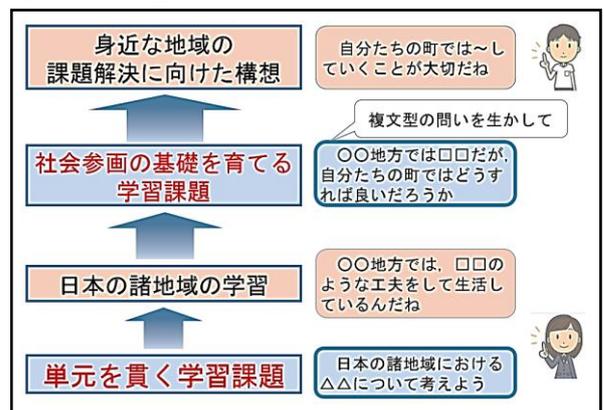


図13 単元を貫く学習課題と社会参画の基礎を育てる学習課題

これにより、諸地域を見てきた視点を生かした身近な地域の考察につながり、身近な地域の判断的知識の習得に結び付く。この流れで授業を展開することで、社会参画意識は高まり、社会参画の基礎が育まれると考える。

4 地域の在り方について考察し、生徒の社会参画意識を高める工夫（視点2）

(1) 身近な地域素材の教材化

身近な地域は、地理的分野の学習の中でも社会をより身近に感じることができるため、興味・

*4) 吉川幸男 『「差異の思考」で変わる社会科の授業』 2002 明治図書

関心を高め、社会参画への意識を高めることができる最も有効な教材であると考えます。今回は、教師が長島町のフィールドワークや関係機関への取材活動を通して、身近な地域の問題について直接話を聞き、検証授業に向けて教材化を図っていく。取材では、授業の趣旨及び学習の視点を明確に伝えて、必要な情報や資料の収集につなげる。また、教材化を進める際には、生徒にとって見慣れたものや生活と密接につながっているものを教材化すること、資料を通して考察する視点を意識することが大切である(図14)。今回の検証授業では、「環境保全、環境問題」と「人口問題」をテーマにした単元構成を考えていく。そこで、行政機関、環境保全を行っている自主団体等へ取材を行うこととした。

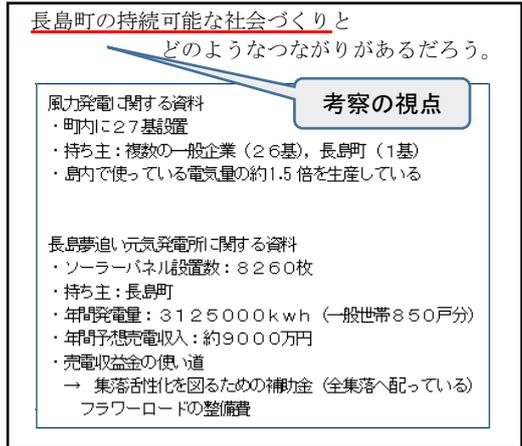


図14 取材を基に作成した資料の一部

(2) 諸地域と身近な地域における知識の関連付け

本研究では、「日本の諸地域」の大単元で社会参画の基礎を育めるように、生徒が日本の諸地域で習得した知識を身近な地域と結び付けた学習内容で実施する。

図15は、諸地域と身近な地域の関連付けの例を示した学習内容である。図11で考えたとき、具体的事実や記述的知識の段階では、個別的な知識であるため身近な地域にあてはまらない部分が多く、身近な地域と関連付けて考察することが難しい。しかし、地理的認識が高められていると、知識の質がより概念化するため諸地域と身近な地域の関連付けが容易になると考える。このような手立てを授業に取り入れることで、社会参画の基礎の育成に結び付けたい。

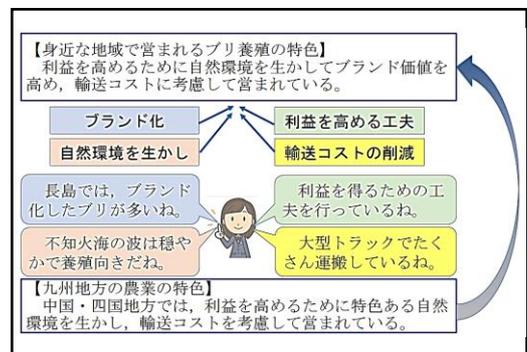


図15 諸地域と身近な地域の関連付け

5 社会参画の基礎を育てる単元構成のモデル (視点3)

3, 4を基に、社会参画の基礎を育てる単元構成のモデルを考案した(図16)。

まず、身近な地域で起こっている地理的な問題点や考察の視点について触れ、身近な地域への意識付けを行う。「日本の諸地域」の単元では、考察の視点に基づいた地域への理解を深めることが大切であるため、高めた知識を身近な地域に置き換える活動を毎時間の授業の最後に行う。

さらに、社会参画の基礎を育てる学習課題を設定することで、身近な地域の問題点を焦点化し、「持続可能な町づくり」に向けて構想を図っていく。学習課題と考察の視点が単元の中で構造化され、諸地域と身近な地域が結び付くことで生徒の思考は能動的になり、社会参画意識の向上が期待できる。

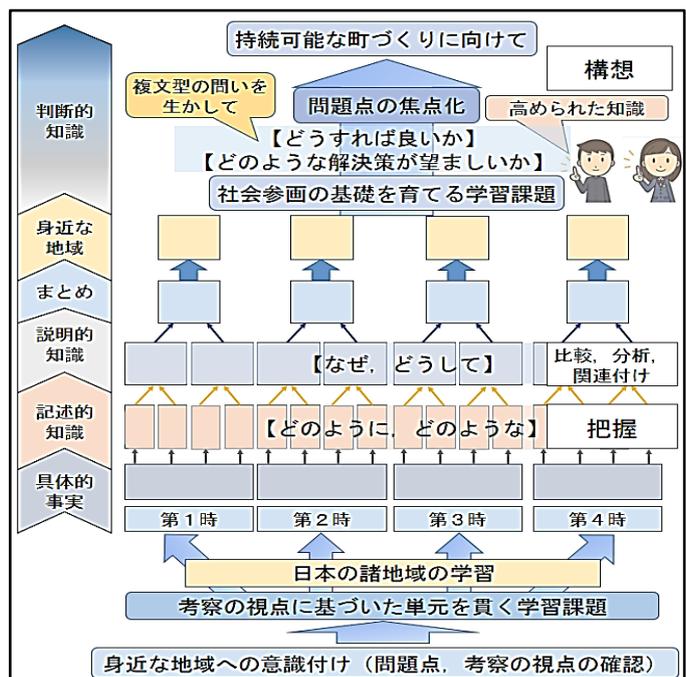


図16 社会参画の基礎を育てる単元構成のモデル

6 検証授業Ⅰ（「九州地方 ー環境問題、環境保全に向き合う人々の暮らしー」）の実際

検証授業Ⅰでは、これまでの研究を基に作成した社会参画の基礎を育てる単元構成のモデルを生かして授業を進め、生徒の地理的認識と社会参画意識がどのように変容するか検証していくこととした。

(1) 検証授業Ⅰの概要

ア 小単元名 「九州地方 ー環境問題・環境保全に向き合う人々の暮らしー」

イ 実施学年 第2学年

ウ 実施時期 平成29年7月

エ 小単元の目標

(ア) 社会的事象への関心・意欲・態度

環境問題や環境保全を中核として、九州地方の地域的特色について関心を高め、意欲的に追究することができる。

(イ) 社会的な思考・判断・表現

九州地方の自然環境や産業等に関する特色ある事象について、多面的・多角的に考察し、自分の言葉で表現することができる。

(ウ) 資料活用の技能

自然環境や環境問題、環境保全に関する統計地図や雨温図、人々の生活や産業に関する統計資料などについて読み取り、ワークシートにまとめることができる。

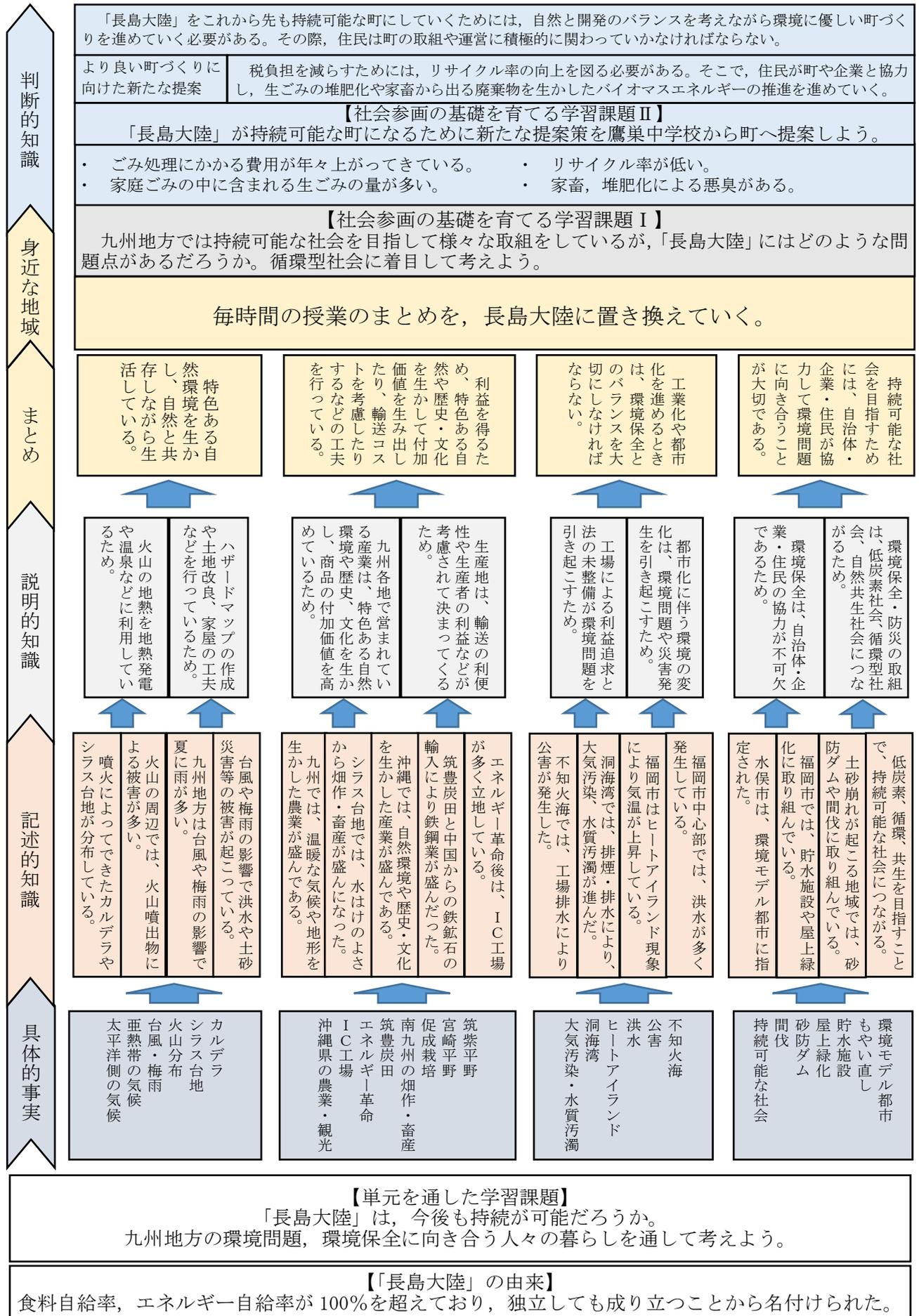
(エ) 社会的事象についての知識・理解

九州地方の地域的特色が様々な事象と結び付き、影響を及ぼし合って成り立っていることを理解することができる。

オ 指導計画（全5時間）

時	ねらい	学習課題	本時のまとめ
1	九州地方の自然環境の特色を、自然環境と災害との関連から考察する。	九州地方の自然環境とどのように向き合えば良いだろうか。	多様な自然環境を生かし、自然と共存しながら生活していく必要がある。
	単元を貫く学習課題 「長島大陸」は、今後も持続可能だろうか。九州地方の環境問題、環境保全に向き合う人々の暮らしを通して考えよう。		
2	九州地方の農業や工業の特色を、地理的条件と結び付けて考察する。	九州地方では、農業や工業を営む上でどのような工夫を行っているだろうか。	利益を得るため、特色ある自然環境や歴史・文化を生かして付加価値を生み出したり、輸送コストを考慮したりするなどの工夫を行っている。
3	九州地方で起こった環境問題で共通していることを押さえ、今後も発展させていく上で大切なことについて考察する。	都市化と工業化を進めていくためには、環境面においてどのようなことが大切だろうか。	工業化や都市化を進める際は、環境保全とのバランスを大切にしなければならない。
4	九州地方における環境保全に向けた取組を通して、持続可能な社会づくりを目指すためにどのようなことが大切なのか考察する。	持続可能な社会づくりに向けてこれからどのような体制づくりが大切だろうか。	持続可能な社会を目指すためには、自治体・企業・住民が協力して環境問題に向き合うことが大切である。
5	長島町の自然問題や環境保全の取組から問題点を見だし、持続可能な社会づくりに向けた構想を提案する。	社会参画の基礎を育てる学習課題 九州地方では、環境保全に関して持続可能な社会を目指して様々な取組をしているが、「長島大陸」を持続可能な町づくりにするためにどうすれば良いだろうか。鷹巣中学校から町へ新たな提案をしよう。	
	「長島大陸」をこれから先も持続可能な町にしていくためには、自然と開発のバランスを考えながら環境に優しい町づくりを進めていく必要がある。その際、住民は町の取組や運営に積極的に関わっていかなければならない。		

カ 社会参画の基礎を育てる単元構成



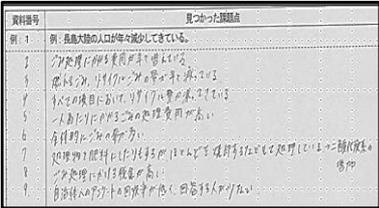
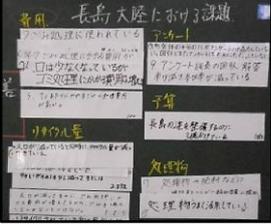
キ 社会参画の基礎を育てる学習活動の工夫

社会参画の基礎を育てる単元構成により、諸地域と身近な地域を結び付け身近な地域の問題に対して主体的に向き合う学習活動を更に充実させるため、以下のような工夫を行った。

学習活動	目的	工夫すること	期待される学習の効果
資料を通して地域の様子について考察する。	生徒の地理的認識を高める。	教師による発問の工夫	資料から把握、比較、分析、関連付けすることで、地理的認識が高まる。
諸地域で習得した知識を基に、身近な地域について考察する。	学んだことが身近な地域に結び付くということを実感させる。	諸地域と身近な地域が結び付く資料提示	諸地域で習得した知識を生かし、資料を通して身近な地域と結び付けることができる。
第1時から第4時までに学習したことを生かし、身近な地域における問題点を見いだす。	身近な地域に関する問題点を明らかにし、見通しをもたせる。	身近な地域の問題点の焦点化	地域の問題点を焦点化することで解決すべき点が明確になり、より深い考察、構想につなげることができる。
協働的な学びを通して、課題を焦点化したり、解決に向けて考察したりする。	協働的な学びを通して、生徒の参画意識を高める。	グループ内での役割分担	役割を与えることで、活動が能動的になり、深い思考につなげることができる。
生徒と共に学習課題を設定する。	諸地域と身近な地域の差異から、生徒に問題意識を抱かせる。	複文型の問いを生かした学習課題の提示	これまで学習してきた諸地域の様子を基に、身近な地域を見つめることができる。
身近な地域の問題に対する関わり方について考える。	積極的な社会参画の必要性を実感させる。	ゲストティーチャーの活用	身近な地域の問題解決に向けて積極的に関わっていくことの必要性を実感できる。

(2) 第5時の実際

過程	学習内容	指導の工夫	教師の発問と生徒の反応
課題把握 動機付け	<p>1 長島町における持続可能な社会づくりに向けた取組を思い出す。</p> <p>長島町では様々な取組をしているね。</p> <p>でも、循環型社会の視点からの取組はどうだろう。</p>  <p>2 リサイクルランキングを示し、長島町の現状を知る。</p>	<p>【問題の焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> 習得した身近な地域に関する知識を、持続可能な社会の視点「低炭素社会」、「自然共生社会」、「循環型社会」に当てはめて、焦点化させる。 	<p>【課題把握と課題追究】</p> <p>T：「今まで学習した取組はどこに当てはまるのでしょうか？」</p> <p>S：「低炭素社会と自然共生社会の部分は当てはまるけど、循環型社会に当てはまるものがないね。」</p> <p>S：「リサイクル率80%の町が県内にあるのに、なぜ長島町は10%なのだろう。」</p>

	<p>3 学習課題を提示する。</p> <p>九州地方では持続可能な社会を目指して様々な取組をしているが、「長島大陸」にはどのような問題点があるだろうか。循環型社会に着目して考えよう。</p>	<p>S：「持続可能な社会づくりに向けてどんな部分が課題だろうか？」</p>																						
<p>情報収集</p>	<p>身近な地域に関する資料を基に循環型社会における問題点を書き出し、グループや全体で焦点化する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <table border="1" style="font-size: small;"> <thead> <tr> <th>資料番号</th> <th>見つかった問題点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>例1</td> <td>別：長島大陸の人口が年々減少してきている。</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>処理のやり方がよくない。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>処理費、清掃費の負担が大きい。</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>ゴミの分別が徹底されていない。</td> </tr> </tbody> </table>   <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px;"> <p>個で問題点を見いだす</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px;"> <p>問題点を焦点化する</p> </div> </div> 	資料番号	見つかった問題点	例1	別：長島大陸の人口が年々減少してきている。	1	処理のやり方がよくない。	2	処理費、清掃費の負担が大きい。	3	ゴミの分別が徹底されていない。	4	ゴミの分別が徹底されていない。	5	ゴミの分別が徹底されていない。	6	ゴミの分別が徹底されていない。	7	ゴミの分別が徹底されていない。	8	ゴミの分別が徹底されていない。	9	ゴミの分別が徹底されていない。	<p>S：「処理費用は町の財政を圧迫しているね。」</p> <p>S：「リサイクル率が低下しているのはなぜだろう。」</p> <p>S：「家畜の排泄物は業者に処理を依頼しているね。」</p> <p>S：「住民アンケートの回収率が低いのは、住民の意識に課題があるからだろうか。」</p>
資料番号	見つかった問題点																							
例1	別：長島大陸の人口が年々減少してきている。																							
1	処理のやり方がよくない。																							
2	処理費、清掃費の負担が大きい。																							
3	ゴミの分別が徹底されていない。																							
4	ゴミの分別が徹底されていない。																							
5	ゴミの分別が徹底されていない。																							
6	ゴミの分別が徹底されていない。																							
7	ゴミの分別が徹底されていない。																							
8	ゴミの分別が徹底されていない。																							
9	ゴミの分別が徹底されていない。																							
<p>課題追究</p>	<p>4 新たな課題を提示する。</p> <p>持続可能な社会づくりに向けた改善策を、鷹巣中学校から町へ提案しよう。</p> <p>5 複数の課題を関連付けて改善策を考え、提案する。</p>  <p>6 提案を黒板に提示し、統合・関連付けをしてまとめていく。</p> <p>7 長島町役場の方からのメッセージビデオ1を視聴する。</p> <p>【社会参画へのつなぎ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 九州地方で学習した諸地域の取組を参考にさせる。 町へ提案する形をとることで、生徒の思考を能動的にする。 <p>【協働による練り上げ】</p> <ul style="list-style-type: none"> より良い提案について、根拠のある意見を引き出させる。 	<p>【構想・練り上げ】</p> <p>T：「持続可能な社会づくりに向けて新たな提案をしましょう。」</p> <p>S：「風力・太陽光発電の売電収益金を使ってバイオマスエネルギーや生ごみの堆肥化を進めれば、持続可能な社会づくりにつながるのかな。」</p> <p>S：「堆肥化は、住民に知ってもらうためにも、公民館や小中学校から導入した方がいいね。」</p>																						
<p>課題解決</p>	<p>8 単元を通した学習課題の答えを考える。</p> <p>9 長島町役場の方からのメッセージビデオ2を視聴する。</p>  <p>【学習の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 諸地域と身近な地域は様々な関連があり、社会の仕組みを地域づくりに生かすことで、持続可能な社会の実現につながる自分なりの考えをもたせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; display: inline-block;">  <p>持続可能な社会づくりのためには、一人一人が主体的に関わっていくことが大事だね。</p> </div>	<p>【学習のまとめ】</p> <p>T：「長島町が持続可能な町になるためには、どんなことが大切でしょうか？」</p> <p>S：「役場や企業だけが努力すればいいのかな。」</p> <p>S：「自分たちにできることを考えることも大切だね。」</p> <p>S：「九州地方の学習から、自助・共助・公助によるつながりが大切だと思う。」</p>																						

(3) 検証授業Ⅰの考察

ア 社会参画の基礎を育てる学習活動の成果と課題

工夫したこと	○ 成果	▲ 課題
生徒の地理的認識を高めるための発問の工夫	○ 知識の段階に応じた問いにより，地理的事象の把握から比較，分析，関連付けへと知識の段階的な習得が可能であることが分かった。	▲ 全ての質問に対して記述させていたため，生徒がじっくりと思考する時間を確保することができなかった。そのため，次の検証授業では，記述する内容を絞る必要がある。
諸地域で習得した知識を基に，身近な地域について考察するための効果的な資料提示	○ 諸地域で使用したものに近い内容の資料を使用することで，日本の諸地域で学習したことが身近な地域ともつながるということを実感することができた。	▲ 資料の数が多かったため考察に時間がかかった。捉えたいことを明確にし，資料を絞って提示する必要がある。
身近な地域における問題点の焦点化	○ 毎時間，身近な地域について考察したことを持続可能な社会づくりの視点に当てはめていくことで，生徒は循環型社会に問題があることを理解することができた。	▲ 単元の最後に身近な地域の問題点を把握するための図を掲示したが，持続可能な町づくりをより意識させるためには単元の最初から図を掲示する必要がある。これにより，課題解決の視点を単元全体で見通すことが可能となる。
複文型の問いを生かした社会参画の基礎を育てる学習課題の提示	○ 「九州地方では～だが」と示すことで諸地域を見てきた視点が明確になり，身近な地域の考察につなげることができた。	▲ 諸地域から身近な地域につなげるためにも，差異の思考を生かした課題設定の工夫を更に講じる必要がある。
グループ内での役割分担	○ 役割を与えたことで，協働的な活動が活発になった。	▲ 教師の手立て不足により，協働的な活動による生徒の思考が深まらなかったため，思考の可視化や学習形態の工夫をしていく必要がある。
身近な地域と向き合うための，ゲストティーチャーの活用	○ 身近な地域の問題に実際に関わっている人の話を聞かせることで身近な地域への興味・関心を深め，社会参画の必要性を自覚させることができた。	▲ 今回は事前録画による活用であったため意見交換ができなかった。次回は，実際に地域の問題に関わっている人に授業を見てもらい，生徒の活動の様子を踏まえて話をしてもらうことで生徒の社会参画への意識の向上を図りたい。

7 検証授業Ⅱ（「中国・四国地方 ー都市と農村の変化と人々の暮らしー」）の実際

検証授業Ⅱでは、検証授業Ⅰの分析で明らかになった改善点について単元構成のモデルによる授業で取り組み、生徒の社会参画の基礎が育まれる過程や思考の深まりの変容が見取れるようにしていくこととした。

(1) 検証授業Ⅱの概要

ア 小单元名 「中国・四国地方 ー都市と農村の変化と人々の暮らしー」

イ 実施学年 第2学年

ウ 実施時期 平成29年10月

エ 小单元の目標

(ア) 社会的事象への関心・意欲・態度

人口問題や都市・村落を中核として、中国・四国地方の地域的特色について関心を高め、意欲的に追究することができる。

(イ) 社会的な思考・判断・表現

中国・四国地方の自然環境や産業等に関する特色ある事象について多面的・多角的に考察し、自分の言葉で表現することができる。

(ウ) 資料活用の技能

中国・四国地方の人口や都市・村落に関する主題図、統計資料を読み取り、ワークシートにまとめることができる。

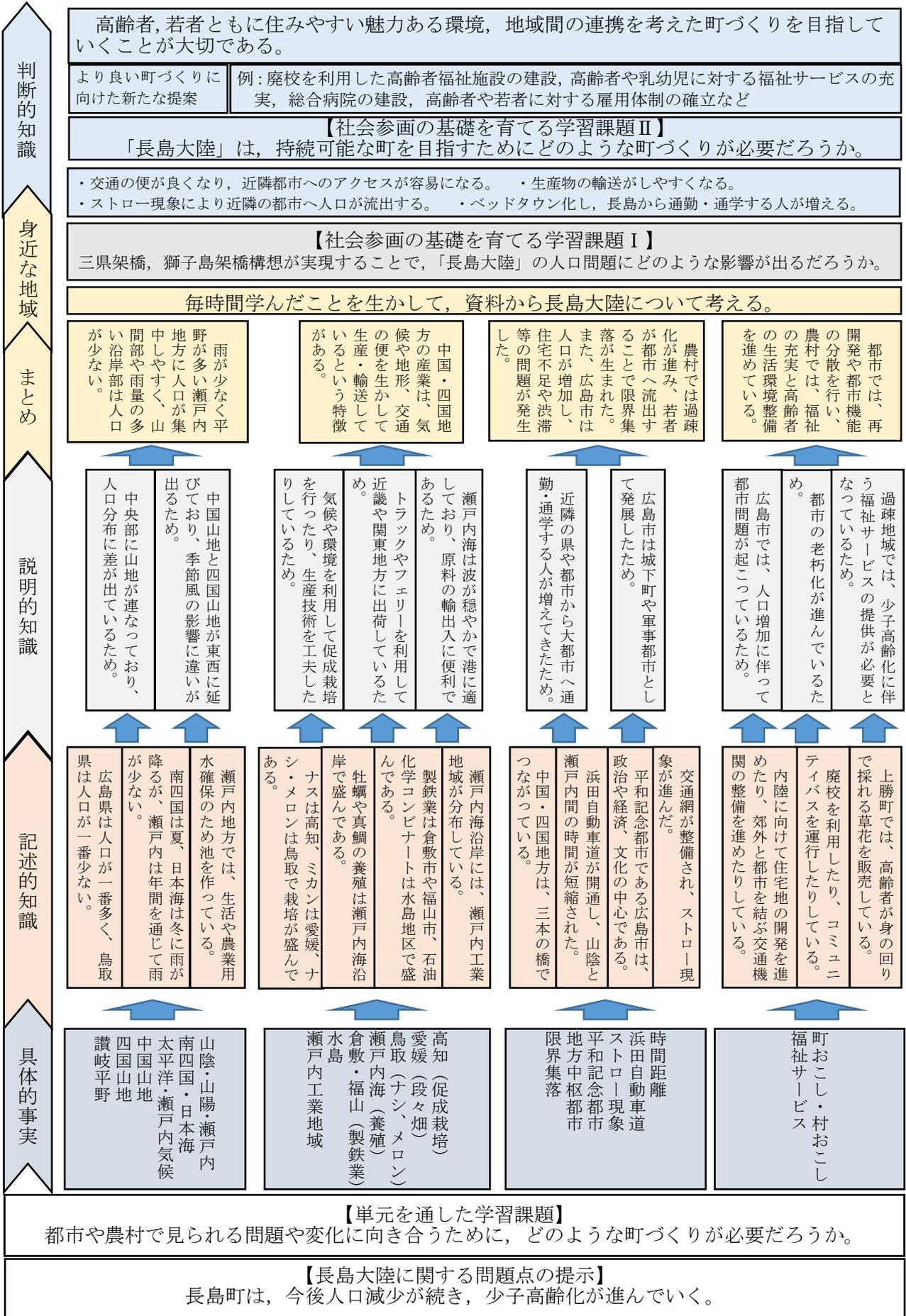
(エ) 社会的事象についての知識・理解

中国・四国地方の地域的特色は、様々な事象と結び付き、影響を及ぼし合って成り立っていることを理解することができる。

オ 指導計画（全5時間）

時	ねらい	学習課題	本時のまとめ
1	長島町の人口に関する資料から、今後消滅する恐れがあることに気付かせる。		
	中国・四国地方の人口分布の特徴を、自然環境や地形からつかむ。	人口が集中している地域と過疎化が進んでいる地域はどのように分かれているのだろうか。	中国・四国地方は、雨が少なく平野が多い瀬戸内地方に人口が集中しやすく、山間部や雨量の多い沿岸部は人口が少ない。
	単元を貫く学習課題 都市や農村で見られる問題や変化に向き合うために、どのような町づくりが必要だろうか。		
2	中国・四国地方の農業や工業の特色を、地理的条件と結び付けて考察する。	中国・四国地方の農業や工業は、どのような特徴を生かして営んでいるだろうか。	中国・四国地方の産業は、気候や地形、交通の便を生かして生産・輸送している。
3	中国・四国地方の交通の便が改善されたことで生じた都市や農村の問題点について考察する。	交通の便が良くなることで、都市や農村ではどのような問題に直面しているだろうか。	農村では、若者が都市へ流出することで限界集落が生まれた。また、広島市は人口が増加し、住宅不足や渋滞等の都市問題が発生した。
4	中国・四国地方の都市や農村では、人口問題の改善に向けてどのような取組をしているか考察する。	農村や都市では、人口問題の解決に向けてどのような努力をしているのだろうか。	都市では、機能の分散に向けた取組を行い、農村では、福祉サービスの充実と高齢者の生活環境整備を進めている。
5	三県架橋、獅子島架橋構想が実現した際のおよび問題点を出し合い、長島町がこれに対し人口減少に対してどのように向き合えば良いか考察する。	社会参画の基礎を育てる学習課題 三県架橋、獅子島架橋構想が実現することで、長島町の人口問題にどのような影響が出るだろうか。また、橋が架かっても持続可能な「長島大陸」を目指すために、どのような町づくりが必要だろうか。	
		架橋構想が実現すると、長島町の人口流出や少子高齢化がより一層進む可能性がある。これからは、高齢者、若者ともに住みやすい魅力ある環境づくりや地域間の連携を考えた町づくりを目指していくことが大切である。	

カ 社会参画の基礎を育てる単元構成



キ 検証授業Ⅱに向けた改善

(7) 1単位時間の中で捉えたい内容を焦点化したワークシートの工夫

検証授業Ⅰでは、1単位時間で押さえるべき内容の全てを教師の発問から進めようとしたため、時間が不足し、生徒に十分思考させることができなかった。そこで、1単位時間で捉えたい内容の焦点化と、生徒の思考の変容が分かるようなワークシートの工夫を行った(図19)。

生徒には、毎時間の予習に取り組みさせている。予習を通して習得した具体的事実を知識として身に付けさせるために、主体的な活動を通して位置や分布を把握させる。次に、統計資料を使って習得した記述的知識

の根拠について、比較、分析、関連付けを行って説明的知識の習得を図る。これにより、記述的知識の部分と説明的知識の部分とを焦点化することができる。また、学習のまとめでは、授業を通して高めた地理的認識から授業前に予想したことを見直すことで、どのように変容したか認識できるようにする。

(4) 諸地域と身近な地域を結び付ける資料の精選に関する工夫

諸地域の学習で習得したことと身近な地域が結び付くために、考察の視点を焦点化した資料提示によって諸地域と同様の様子が見られることに気付かせるようにした(図20)。この授業では、中国・四国地方の学習を通して「農村で起こっている過疎化」や「若者の人口流出による限界集落の発生」という説明的知識を習得していることを、身近な地域を見ていく際に、生徒が「自分たちの長島はどうだろうか」という視点で見えていくことにねらいがある。そこで、「年齢別人口」と「年齢別産業人口」の資料を提示し、「少子高齢化」と「一次産業における後継者不足」の2点から、「自分たちの住んでいる地域も中国・四国地方で学習したことと同様のことが言えるのではないか」ということを気付かせる。このように、資料を精選することで、生徒は諸地域と身近な地域を結び付けやすくなる。

図19 改善点に基づいたワークシートの工夫

図20 諸地域と身近な地域を結び付ける資料

(d) 学習課題設定の工夫

検証授業Ⅱでは、長島町の持続可能な町づくりをより意識させるために、地域が抱えている問題を単元の最初に確認することとした。中国・四国地方で取り上げる考察の視点は「都市や村落、人口問題」であるため、単元の最初に長島町における人口構成、今後の変容等について考察させる資料を学級全体に提示した。長島町が人口減少と少子高齢化といった大きな課題を抱えていることを生徒が捉えた上で、「都市や農村で見られる問題や変化に向き合うためにどのような町づくりが必要だろうか」と単元を貫く学習課題を設定する。この流れにより、生徒は課題解決の視点を単元全体で見通すことができる。単元の最後では、長島、島原、天草を結ぶ三県架橋構想と長島、獅子島を結ぶ獅子島架橋構想を題材に、「架橋構想が実現することで、長島町が抱えている人口問題にどのような影響が出るか」と設定する。生徒が中国・四国地方の本四連絡橋建設による人口移動を基に、架橋構想が実現する際の良い点と心配される点について考察することで問題点の焦点化を図り、長島町の持続可能な町づくりの在り方に向けた考察につながられるようになる(図21)。

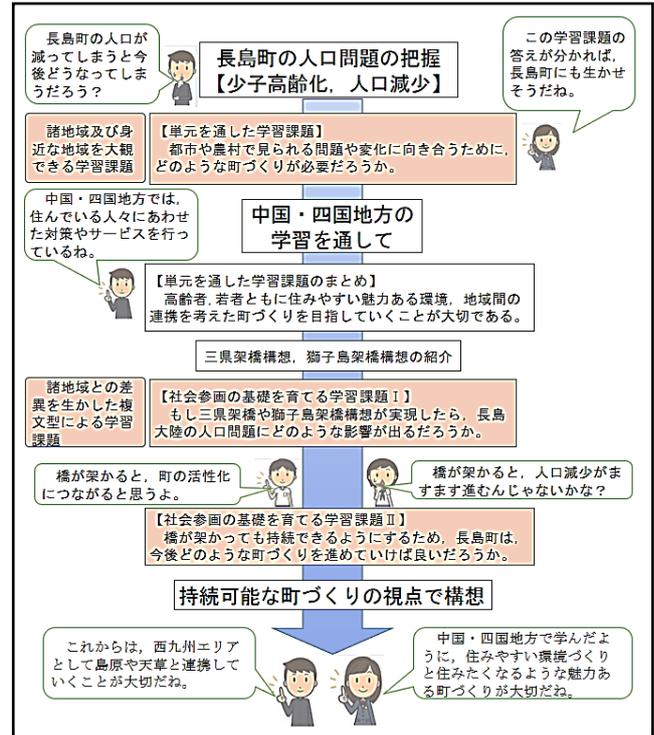


図21 諸地域の学習から身近な地域につなげる学習課題設定

(e) 思考の過程を可視化するための工夫

検証授業Ⅱでは、協働的な活動を通して思考を深める手立てが不足していた。そこで検証授業Ⅱでは、生徒の思考が可視化できるように工夫を行った。図22は、中国・四国地方における人口増減率の分布図から説明的知識を習得しようと考えた様子である。生徒は、橋や山地を書き込み、考えたことを可視化することで、地形や交通の便の改善が人口分布に影響を与えていることを捉えることができる。また、図23は、単元の最後で身近な地域の町づくりの在り方について構想した様子である。この授業では、身近な地域で問題になっている少子高齢化の視点と、中国・四国地方の学習を通して理解した町づくりの視点に分け、それぞれの視点が結び付くような町づくりの在り方を考えさせる。生徒は、気付いたことや資料から分かったことを書き込みながら地域の在り方について様々な視点から構想できるようになる。

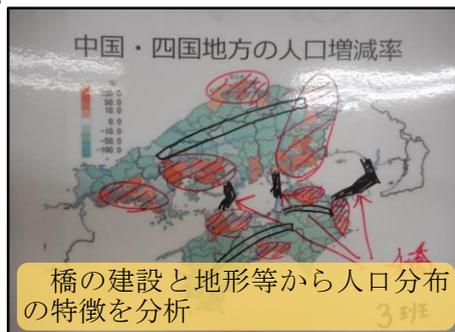


図22 可視化を通して人口分布の特徴を分析した様子

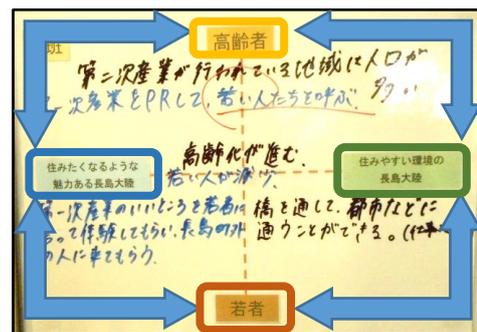
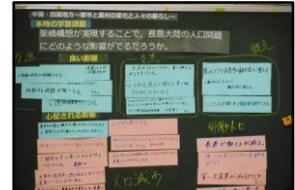


図23 思考を可視化することで町づくりの在り方について構想した様子

(2) 第5時の実際

過程	学習内容	指導の工夫	教師の発問と生徒の反応
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">課題把握</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">動機付け</p>	<p>1 中国・四国地方で学習したことを思い出す。</p> <p>2 長島町の人口問題について確認する。</p> <p>3 三県架橋，獅子島架橋構想について確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>橋が建設されると，人口減少が更に進むかもしれないね。</p>  </div>	<p>【問題の焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> 中国・四国地方で学習してきたことを大観できるようにする。 架橋構想と人口問題を関連付けて考えられるようにする。 	<p>【課題把握と課題追究】</p> <p>T：「中国・四国地方では，どのようなことを学習したでしょうか？」</p> <p>S：「本四連絡橋が建設されて人の移動に変化が出てきたね。」</p> <p>S：「新たな人口問題に向き合うために，都市，農村では住みやすい環境づくりを進めているね。」</p> <p>S：「そういえば，長島にも新しい橋を作る動きがあるね。」</p>
	<p>4 学習課題を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p>架橋構想が実現することで，「長島大陸」の人口問題にどのような影響が出るだろうか。</p> </div>		<p>S：「架橋構想が実現すると，長島町の人口問題にどのような影響が出るだろうか？」</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">情報収集</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>架橋構想が実現したときに考えられる良い影響や心配される影響について，グループで共有し学級全体で焦点化する。</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">    </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">個で問題点を見いだす</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">問題点を焦点化する</div> </div>		<p>S：「近隣都市へのアクセスが容易になるね。」</p> <p>S：「長島町がベッドタウンになり，近隣都市へ通勤・通学する人が増えるかもね。」</p> <p>S：「中国・四国地方のように，ストロー現象で人口が流出するかも。」</p> <p>S：「そうしたら，少子高齢化が更に進むかもしれないね。」</p>
	<p>5 新たな課題を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p>橋が架かって持続可能な「長島大陸」を目指すために，どのような町づくりが必要だろうか。</p> </div> <p>6 これからの町づくりについて，複数の資料を関連付けて考える。</p> <p>7 ジグソー的な学習により，考えを深めていく。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>(1) 資料を基にグループ内で考察し，ホワイトボードに記入（黒）</p> <p>(2) 他のグループの考えを取り入れ，自分たちのグループに，新たな考えを盛り込む（赤）</p> </div> <p>8 提案を黒板に提示し，これからの町づくりの在り方について構想する。</p>	<p>【社会参画へのつなぎ】</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで学んだことを参考にさせる。 <p>【協働による練り上げ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員に役割をもたせ，能動的な活動を促す。 より良い提案にするために，根拠のある意見を引き出させる。 	<p>【構想・練り上げ】</p> <p>T：「どのような町づくりを進めていけば良いでしょうか？」</p> <p>S：「中国・四国地方で学習した村おしの取組は，長島でも生かせそうだね。」</p> <p>S：「でも，若者の流出はどうするの？」</p> <p>S：「第二次，三次産業が発展すれば，定住する若者が増えるかもしれないよ。」</p> <p>S：「都市の方へ出て行った人たちが戻ってくることも期待できるね。」</p> <p>S：「高齢者が住みやすく，若者にとって魅力ある町づくりができればいいね。」</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">課題追究</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">考察・構想</p>			

課題解決	まとめ	9 地域間の連携という視点で本時のまとめを行う。	【学習の振り返り】 ・ 中国・四国地方で学習したことと身近な地域を結び付けることで、地域の様子が見えてくることを自覚させる。	【学習のまとめ】 T：「近隣の地域とはどのような関係が望ましいでしょうか？」 S：「西九州エリアとして、島原や天草と連携していくことが大切だと思う。」 G：「長島の未来を担う立場として、地域や学校の取組に積極的に関わってほしい。」 S：「長島町は、自分たちでつくり上げるという意識をもつことが大切だね。」
		10 地域おこし協力隊の方の話を聞く。 	・ ゲストティーチャーの話を通して、社会参画の必要性を再確認する。	

(3) 検証授業Ⅱの考察

ア 社会参画意識の変容について

(7) 「身近な地域の問題を解決したいと思うか」について

身近な地域の問題解決に対する参画意識は、図27に示す結果となった。実態調査のときと比べて、肯定的に捉える生徒が2回の検証授業を通して徐々に増加した。また、実態調査のときには否定的に捉えていたが、検証授業Ⅱを終えて肯定的な考えへと変容した生徒は7人いた。これは、諸地域の学習から身近な地域に考えを引き寄せ、身近な地域の問題点を見いだす過程の中で、徐々に町民としての所属感が芽生えてきたことが理由の一つとして考えられる。

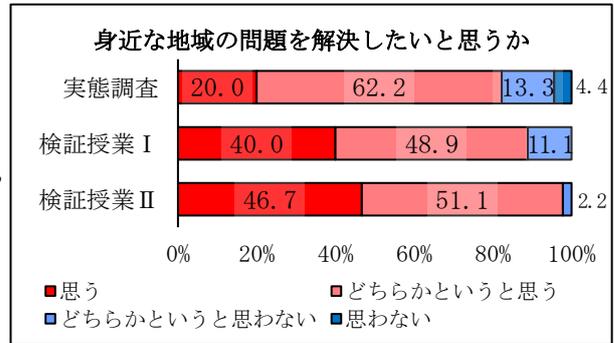


図27 社会問題に対する解決意識の変化

(イ) 「自分の参画によってより良い方向に改善できると思うか」について

身近な地域の問題解決に対する参画意識の変化は、図28に示す結果となり、検証授業を重ねるごとに肯定的に捉える生徒が大幅に増えた。また、実態調査のときには否定的に捉えていたが、検証授業を経て肯定的な考えに変容した生徒は15人いた。

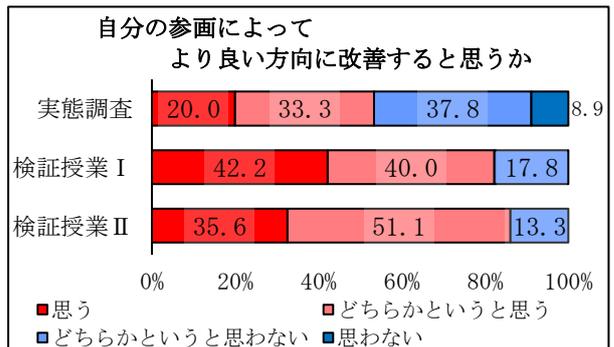


図28 参画が与える影響に対する意識の変化

図29は、ある生徒の記述から見取った社会参画意識の変容である。この生徒は、実態調査時に「(自分が関わっても)改善はできない」という否定的な意見を書いていた。検証授業Ⅰ後の調査においても考えが変わることはなかったが、検証授業Ⅱを通して「参画することで(自分の住んでいる町の)問題を知ることができる」と、問題意識をもつことの重要性に関する記述へと変容した。このように、問題点を解決するための構想を練ることで、これまでの生活では見

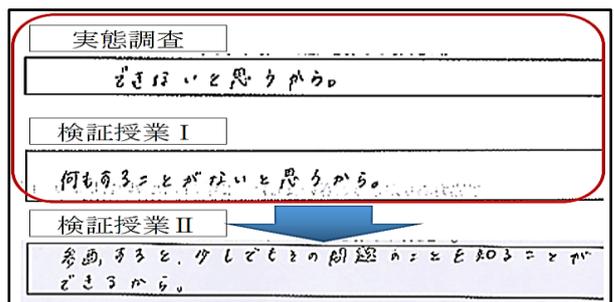


図29 社会参画意識の変容

えていなかった視点が生徒の中に生まれ、生徒の社会参画意識の向上に結び付くのではないかと考える。

イ 地理学習の有用性を味わい、地理的分野への興味・関心を高める手立てについて

(7) 発問と習得する知識、諸地域と身近な地域を結び付ける手立てについて

図30は、中国・四国地方の産業における知識の成長と身近な地域へのつながりを示したものである。記述的知識は、位置や分布、場所を問い、中国・四国地方の産業分布を把握することで習得される。説明的知識は、産業が分布している根拠について問い、資料やグラフ等からの比較、分析、関連付けを通して、気候や地形、交通の便のよさを見いだすことで習得される。さらに、高めた知識を結び付けて、中国・四国地方の産業の特徴についてまとめさせる。

身近な地域への結び付けは、諸地域で学んだことと関連付けることで可能となる。この授業では、身近な地域の産業、気候、地形、交通等に関する資料を基に「長島町はどうだろうか」という視点で考察させることで、生徒は身近な地域の産業について多面的・多角的な考察ができるようになった。

このように、段階的な問いによって生徒の地理的認識が高まり、高めた知識によって諸地域と身近な地域を結び付けることができるようになる。

(4) 単元を通した学習課題と、社会参画の基礎を育てる学習課題の設定について

図31は、検証授業ⅠとⅡの単元を貫く学習課題及び社会参画の基礎を育てる学習課題に対する変容の違いと生徒の記述例を示したものである。

検証授業Ⅰの単元を貫く学習課題は、身近な地域に特化しているため、身近な地域に考えを引き寄せられるというよさがあった。その一方で、考えが身近な地域に偏ってしまうことで視野が狭くなり、諸地域と身近な地域を毎時間結び付けることに難しさがあるといった課題点が出てきた。検証授業Ⅱの学習課題は、諸地域、身近な地域共に考察できる汎用性の高い学習課題となっているため、毎時間の授業で諸地域と身近な地域を結び付けやすい展開で進めることができた。

社会参画の基礎を育てる学習課題については、検証授業Ⅰの「解決策の提案につなげる学習課題」と検証授業Ⅱの「地域の在り方について考えるための学習課題」で設定したが、これらの単元を通した生徒の記述などから、どちらの学習課題においても社会参画意識が高

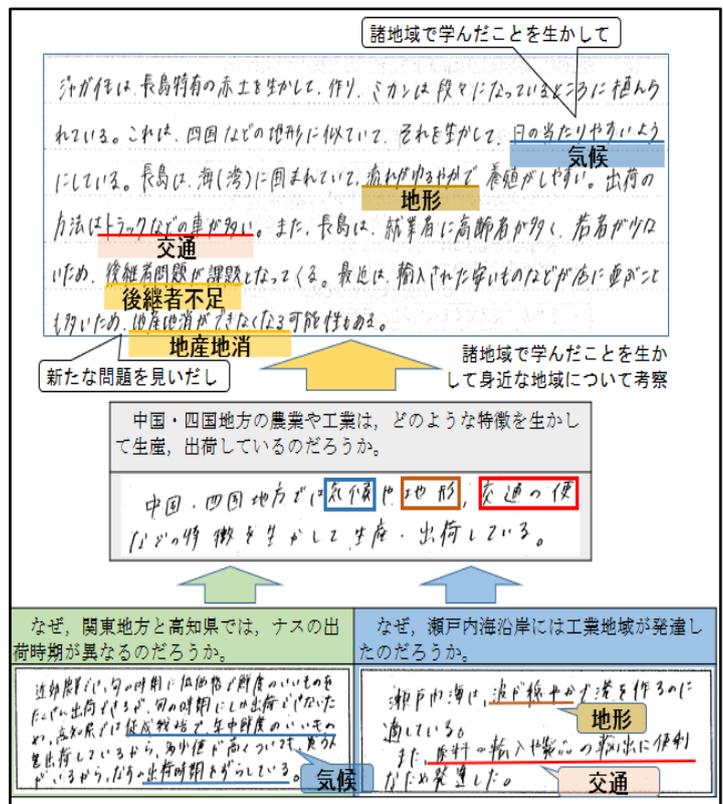


図30 諸地域で習得した知識を身近な地域に関連付けた例

	検証授業Ⅰ (九州地方)	検証授業Ⅱ (中国・四国地方)
単元を通した学習課題	長島町は今後も持続が可能だろうか。	都市や農村で見られる問題や変化に向き合うために、どのような町づくりが必要だろうか。
社会参画の基礎を育てる学習課題	長島町の持続可能な社会づくりに向けた問題点から、解決策を提案しよう。	三県架橋、獅子島架橋が完成することで、長島・天草・島原はこれからどのような関係にあることが望ましいだろうか。
生徒の解答例	ゴミや生ごみを効率よく利用することで、二酸化炭素の排出を減らし、循環型社会を目指す。また、自然を守ることで、自然共生社会を目指す。	お互いの地域の工夫などを、長島や天草、島原で共有していき、住みやすい環境を目指していくことが大切である。

図31 学習課題に対する生徒の記述の例

まっていることが分かった。身近な地域について考えを深めるため、学習課題を基に授業を進めることは、①生徒が問題意識をもって地域を大観するための視点として有効であること、②設定する学習課題は諸地域及び身近な地域共に考察できる汎用性の高い内容が望ましいこと、③複文型による諸地域と身近な地域をつなげる新たな学習課題設定が有効であることの3点が明らかになった。さらに、社会参画についての調査結果(図27, 図28, 図29)から、日本の諸地域における各単元においては、身近な地域に関する問題点を示し続けることが、生徒の社会参画意識の高まりに影響を与えることが分かった。

ウ 社会参画意識を高める手立てについて

(ア) 諸地域と身近な地域を結び付けることについて

検証授業Ⅱでは、生徒が中国・四国地方について学習したと身近な地域を結び付けることができるように、毎時間課題を提示して取り組んだ。記述を見取る視点については、表1を活用し、社会参画の基礎の要素である「自分ごととして」、「学んだことを生かして」、「問題意識をもって」、「主体的に取り組む」という視点で、生徒の記述を判断した(図32)。

授業後に示す課題の内容や指示の出し方の違いはあるが、全体的に成果が表れたのは、「自分ごととして」、「問題意識をもって」、「主体的に取り組む」の三つの視点である。単元の最初は、身近な地域を見る視点が「自然環境」に限定されていたが、授業を進めることで、「産業」、「人口問題」、「交通の便」、「町づくり・村おこし」などの考察する視点が増えてきたことが、生徒の記述内容の深まりと関係していると考えられる。一方、「学んだことを生かして」の項目については、生徒が習得したことを活用できるようになるための手立てが不足していたため、諸地域の学習を通して習得したことを生かした表現が十分にできていなかった。諸地域から身近な地域に引き寄せて考察する際に、授業の中で習得した知識を積極的に活用できる場面を意図的に設定することが大切であると考えられる。

1 自分ごととして						2 学んだことを生かして					
	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時		第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
◎	15	12	9	18	15	◎	8	9	8	15	6
○	24	23	31	17	24	○	19	27	17	15	14
△	5	10	3	9	1	△	17	9	18	14	20

3 問題意識をもって						4 主体的に取り組む					
	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時		第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
◎	0	7	20	24	15	◎	12	13	10	11	11
○	3	12	23	16	25	○	19	19	24	22	26
△	41	26	0	4	0	△	13	13	9	11	3

◎の内容の生徒が15人いたことを示す。
※ ◎、○、△は、表の基準に基づいて判断している。

図32 諸地域と身近な地域の結び付きに関する生徒の変化

(イ) 身近な地域の問題に対する意識の変容

「長島町の人口減少は止められると思いますか」に対する11段階判断では、図33のように生徒によって考え方に違いがあることが分かった。第5時を例に挙げると、IさんとKさんは授業を通して肯定的な判断をしており、「対策をとれば改善の余地がある」など意見を述べていた。一方、HさんとJさんは、否定的な判断をしており、「他の地域に比べて人口の少ない

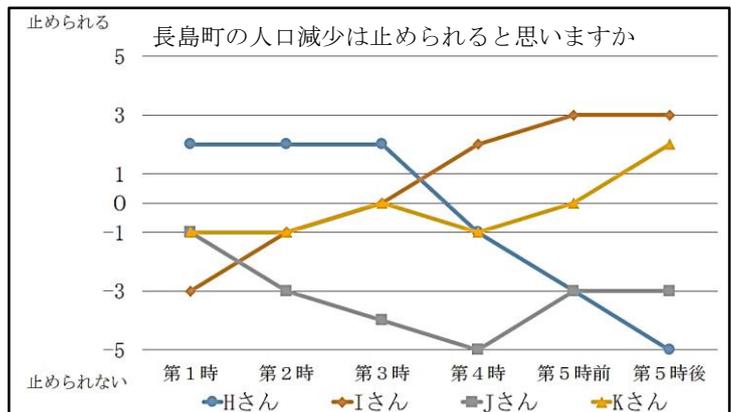


図33 身近な地域の問題に対する意識の変容

長島町では、対策を取っても人口減少を抑制できない」、「若者はどうしても規模の大きい都市に移ってしまう」という意見を述べていた。これらの判断、記述から、授業を通して生徒の考え方に大きな違いが出てくることが分かった。

また、身近な地域の問題に対する判断について、Hさんの振れ幅が最も大きく、最終的にHさんは、「止められない」と判断している。この生徒の学習を通じた変容は図34のとおりである。

	授業内容	身近な地域と結び付ける	身近な地域の問題について判断
第1時	中国・四国地方の自然環境、人口分布の特徴	にきわんでいる方の平屋、本町通りの方に人が集まっている。 伊予の港やうづみの港にも家があつて居る。	止められない 0 止められる
第2時	中国・四国地方の農業、工業の特徴	アツには海がアス、海岸を生かしている じゃがいもや赤土を生かしている でもみかんはしゃめんを生かしている それもホアランドして居る	止められない 0 止められる
第3時	時間距離の短縮と人口問題	橋が出来たとたんに人口は減っていき出 ていらた先にくすして居るので長島大陸にも出 て居て人口がふふない。 節もよた。若者は若Pの方に居たらしい。	止められない 0 止められる
第4時	人口問題に向き合う都市、町づくり	街を歩むの2024年の人口が少い。 若い者が多く、長島の方から出て行く者が多い （資料見る）	止められない 0 止められる
第5時前	持続可能な長島大陸に向けて	はしがきがあったら、そのからたす場所として 交流できる。 アローがいらなくなると 人口が急から長島にとどまればまたいろいろ あつた2024年（ホアランド）	止められない 0 止められる
第5時後	新たな町づくりの在り方について構想	若者は若者があつて出ていってしまふ。 この街に若者があつて出ていってしまふことがあつてもあつても よいとすために、住むたいとおのりあつて行くものがあつてよい ことがあつて	多面的な視点から判断 止められない 0 止められる

図34 諸地域と身近な地域の結び付けと問題解決に対する意識の変容（Hさんの例）

Hさんは、第1時の学習で長島町の地形図や人口ピラミッド等を基に、肯定的な考えである「2」と判断している。これは、長島町の中でも人口が多い本校の中学校区のみ範囲で判断していることから、狭い認識の中で考えていたということが記述から推察できる。第2時の学習では、長島町の主要産業である農業、水産業が人口減少に歯止めをかけると考え、前時と同じ「2」と判断している。第3時の学習では、黒瀬戸大橋の建設による人口流出の事実について資料から読み取った記述が見られるが、人口減少についての判断は「2」と変えていない。しかし、第4時の学習になると判断が一変し、「-1」となっている。これは、資料から長島町の「生産年齢人口の減少」という視点がHさんの考えに入ってきたことが理由だと見取れる。そして第5時の学習では、架橋構想実現に伴う人口流出の加速化から授業前に「-3」と判断した。さらに、授業後では、若者の流出は止められないと考え、「-5」の判断に変容している。しかし、Hさんは、「魅力ある町づくり、住みやすい環境づくりが大切」と、人口減少が進む中で新たな町づくりの必要性を記述している。これは、中国・四国地方の学習で習得した知識が概念化し、持続可能な町づくりに向けて身近な地域の問題解決の視点として生かせると判断したからだと捉えられる。この思考過程と記述から、Hさんは、身近な地域の地理的事象を自分ごととして捉えるようになり、学んだことを生かして身近な地域の問題を見だし、主体的に問題の解決に向けて構想できるようになった。このHさんの意識の変容は、社会参画の基礎及び地理的分野における「より良い社会の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追究、解決する態度」が身に付いた姿であるとも言える。

このように、授業を積み重ねることで生徒に社会的事象を考える新たな視点を取り込まれ、身近な地域の問題解決に向けた多面的・多角的な考察につながり、生徒の社会参画の基礎の成長に影響を与えることが、生徒の記述と11段階判断から見取れた。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 地理的な見方・考え方を働かせ、地理的認識が高まる過程の明確化について
 - 地理的な見方・考え方を働かせ、段階的な考察によって地理的認識を高める手立てを明らかにすることができた。
- (2) 問いと習得する知識の構造化について
 - 習得する知識に対応した問いと、生徒の思考の関連を構造化することができた。
- (3) 社会参画の基礎を育てるために有効な学習課題の在り方について
 - 地理的な見方・考え方の五つの視点を踏まえ、習得したい知識の質に応じて発問の仕方を工夫することで、段階的な知識の習得につながった。
 - 諸地域、身近な地域共に考察できる単元を貫く学習課題の設定により、生徒は両方の地域を同じ視点で見ることができるようになった。また、諸地域で学んだことを身近な地域に引き寄せて考えることにもつながった。
- (4) 社会参画の基礎を育てる単元構成のモデルについて
 - 学習指導要領で示されている「考察の仕方」の視点を生かして身近な地域を取り扱うことで、生徒は身近な地域が抱えている問題点を見いだすことができた。
 - 毎時間学んだことを身近な地域について置き換えることで、考える視点が増え、生徒の思考が深まっていった。
 - 身近な地域の問題解決に向けて構想する時間を各単元の最後に設定することで、生徒は様々な視点から思考し、活動が能動的になった。
 - 上記(1)、(2)、(3)を踏まえた指導計画を作成し、授業を進めることで、生徒の社会参画意識が高まり、社会参画の基礎の育成に結び付いた。

2 今後の課題

- 歴史的分野における社会参画の基礎を育む手立て、さらに、地理、歴史的分野で培った社会参画の基礎を公民的分野に結び付ける手立てについて研究を進める。
- 習得した知識を、身近な地域に生かすための手立てについて検討する。
- 他の領域や教科と連携するためにも、カリキュラムマネジメントにより、全教育活動を通じて生徒の社会参画の基礎を育てる教育課程の編成について検討する。

【引用文献】

- 1) 内閣府 『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』 2013年
- 2) 吉田 剛 『二つの学習の側面に機能する地理的概念の体系』 2017年 社会科教育 8月号
- 3) 小原友行 『アクティブ・ラーニングを位置付けた
中学校社会科の授業プラン』 2016年 明治図書
- 4) 吉川幸男 『「差異の思考」で変わる社会科の授業』 2002年 明治図書

【参考文献】

- 中学校学習指導要領解説 社会編 2008年 日本文教出版株式会社
- 中学校学習指導要領 2017年
- 中学校学習指導要領解説 社会編 2017年
- 唐木清志外 『社会参画と社会科教育の創造』 2010年 学文社
- 『学校におけるESDに関する研究』 2012年 国立教育政策研究所
- 『小学校・中学校社会科における
教員の地理的専門性と授業実態』 2014年 上越教育大学
- 『論点整理』及び『審議のまとめ』 2015年 教育課程企画特別部会
- 澤井陽介 『社会科の授業デザイン』 2015年 東洋館出版社
- 『社会参加を視点にした中学校社会科の教材と
評価に関する研究』 2016年 日本教材文化研究財団
- 『ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き』 2016年 文科省国際統括官府
- 『自らより良い未来を創る生徒の育成』 2017年 鹿大教育学部附属中学校
- 『新しい時代を切り拓く資質・能力を身に付けた生徒の育成』 2017年 鹿児島市立伊敷中学校

長期研修者 [上ノ町 亮一]

担当所員 [中熊 信仁]

【研究の概要】

本研究は、将来社会に参画できる生徒を育成するという視点に立ち、日本の諸地域と身近な地域を結び付け、身近な地域の在り方について構想する活動を通して、社会参画意識を高める学習を創造したものである。

まず、社会参画の基礎を育てるために中学校地理的分野における役割を明らかにし、それらを基に「地理的な見方・考え方の成長」と、「学習課題、問いと習得する知識の関連」を構造化した。次に、「日本の諸地域」の単元考察の視点を基に身近な地域の教材化を図り、段階的に知識を高めることで諸地域と身近な地域が結びつくようにした。さらに、どの地域でも汎用的に活用できる単元構成のモデルを作成し、生徒の社会参画意識が単元を通して高まるか検証した。

研究の結果、諸地域と身近な地域を結び付け、身近な地域の課題解決に向けて能動的に思考し、社会参画意識が高まった生徒が増えた。また、地理的認識の成長と社会参画の基礎の育成に、単元構成のモデルが有効であることが分かった。

【担当所員の所見】

学習指導要領が改訂されたが、社会科教育のねらいが「公民としての資質・能力」を培うことにある点は変わらないものである。しかし、情報化やグローバル化が人間の予測を超えて加速度的に進む予測困難な時代にあって、一人一人が未来の創り手となることが期待される中、主権者として持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養や、より良い社会の形成者として課題の追究や解決に主体的に取り組む態度の育成は、これまで以上に求められていく。

本研究は、その意味でも時機を得た研究であるとともに、これまで公民的分野において研究されることが多かった社会参画の基礎の育成を、地理的分野において研究を深めた点に大きな意義が見られる。検証結果からも、日本の諸地域で学んだ知識を、生徒が日頃生活している身近な地域に結び付け、課題を見付け、解決に向けて構想していくことは、生徒の生きて働く知識・技能の習得につながるものであると思われる。

もちろん、社会参画の基礎の育成は、一朝一夕には成就しないものである。教師は、主権者としての資質・能力、つまり公民としての資質・能力の育成を目指し、学習課題や問いを工夫し、更なる主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を図っていく必要がある。その意味で、本研究はその第一歩を踏み出した段階であり、今後の継続的な取組を期待している。